F—2 家庭経営の変動に関する生活史的研究——M家 家計記録を資料として.
(2) 戦前における消費生活の構造

福島大教育 岡村 益 宮城学院女大 ○横山シヅ他4名

目的 本報告は前報告M家家計記録により大正12年～昭和11年まで(才1、2、3期に相当する)の消費生活の構造を分析する。既報K家に関する研究においては1) 社会的条件の変化に対応する生活構造 2) 家族周期 3) 生活財からみた生活史の3視角から縦断的にみたが、今回はさらにこれらの項目を相互関連的にみつつ、その消費生活の構造に対しいかなる家庭経営が行われたかを知ろうとするものである。さらに本事例を通して戦争前後における上層農家の、社会変動に対応する生活行動とその機構を探ろうとする。

方法 各時期と分毎に総合的な消費生活の特徴をみるために、費目毎に支出金額や消費の質的変化や購入頻度をはあくし、これを社会的な出来事、家族周期、この家の出来事と関連させて考察した。

結果 才1期(大正12～15年):才1期はM氏が家督相続し経営の主体者となる。これを機に家屋の改築・修理が行われて住居費の比率が高い。農業経営は順調で生活も安定し、村長就任も4度目に至り、県会議員にも当選するなど社会的地位も上昇した。上層農家としてかなり高水準の生活であったことは、当時すでにカメラ、ラジオを備えていたことによっても推定できる。才2、3期(昭和2～11年):米価・繭価の大暴落に加えて冷害などのため農業所得は減収が続く。一方この時期は病人が多く医療費支出の増加、また子女の結婚、M氏の再婚や長男の応召など臨時的出費の頻度も高く その上各種の役職も加わり交際費額も増大していく。これらの状況の対応策として 家族の基礎的生活費の節減をはかるなど 家格の維持がむしろ優先した面がみられる。